

## ロシア文学とアメリカ黒人文学 ドストエフスキーとリチャード・ライトの二重の意識

佐久間 由梨

### はじめに

ペテルブルグを訪れた人はこの街の不可思議な魅力に目を奪われるにちがいない。モスクワがスターリン様式の威圧感ある集合住宅が立ち並ぶモノトーンの景色だとすれば、ペテルブルグはネヴァ河に反射する西洋式建築のパステルカラーでまぶしい。水路と街道とが織りなす景観が北のヴェニスと呼ばれているのも納得である。

ロシアにありながらペテルブルグは奇妙にも美しい、それはこの都市がそうあるべく意図されて造られているからだ。ドストエフスキーはペテルブルグを「地球でもっとも抽象的かつフィクショナルな街」と表したが、この街が「フィクショナル」である理由はその誕生の歴史をさかのぼれば明らかである。1703年、西洋への窓口となる都市を建設するという野心に燃えていたピョートル大帝は、イタリア人建築家を呼びよせヨーロッパよりもヨーロッパ的な都市の設計を命じた。およそ9年をかけ沼地に建設されたペテルブルグは、ピョートル大帝の理想とする西洋が具現化された人工都市——西洋への憧れと劣等感という亡霊がうずまく混血都市——となった。

ドストエフスキーの作品を読むこと、それは、西洋的なものとスラヴ的なものとが相克するペテルブルグという街へと足を踏み入れることに似ている。後藤明生はペテルブルグを舞台とするドストエフスキー文学を都市小説と位置づけ、ペテルブルグを描くことが「ロシアにおけるヨーロッパ的なものとスラヴ的なものの分裂・矛盾そのものを描くというテーマにつながる」のだと述べている(192)。西洋とスラヴとの混血都市ペテルブルグを背景に、ドストエフスキーの主人公たちの意識もまた、西洋とスラヴの価値観へと分裂し二重化している。「二重の意識」、これこそがドストエフスキーの卓越した筆により映し出される近代ロシア人の意識だということもできるだろう。ドストエフスキー作品の読者はゆえに、ペテルブルグという奇妙な都市において生みだされた、これまた不可思議な人間意識の深層をかいまみることになるのである。

アメリカの作家たち、とりわけ南部作家、ユダヤ系作家、黒人作家は、ドストエフスキーの熱心な読者だった<sup>1</sup>。それはやはりアメリカのマイノリティ作家たちがドストエフスキーの描く

<sup>1</sup> ドストエフスキーに影響された南部作家は William Faulkner, Thomas Wolfe, Flannery O'Connor, Carson McCullers, Walker Percy などである。マッカーズは“Russian Realities and Southern Literature”という記事に

「二重の意識」に共感せずにはいられなかったからだろう。ロシア文学が世界に与えた影響について検証するスティーヴン・マークスによれば、ロシア近代文学の出発点となっているのは西洋とスラヴとの狭間で引き裂かれる人々の苦悩である。この苦悩は、アメリカに属しながらも完全にはその一部ではない南部人、ユダヤ人、黒人たちにとってはなじみ深いものであるがゆえに、教示的でもあったのだろう。

本稿はロシア文学とアメリカ文学の相似と相違を検証する先行研究に基づきながら、ドストエフスキーがアメリカの黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright) におよぼした影響について考察していく。黒人文学の円熟期を支えたライトは自他ともに認めるドストエフスキーの愛読者で、『罪と罰』、『カラマーゾフの兄弟』、『悪霊』などに強く影響された作風を持つことが指摘されてきた。とくにライトの『アメリカの息子』のあらすじが『罪と罰』をなぞらえ、主人公青年による二人の女性の殺害を扱っていること、さらにライトの「地下を生きた男」という短編がドストエフスキーの『地下室の記録』に着想を得ていることなどはよく知られている<sup>2</sup>。

本稿ではこれまであまり比較されてこなかった作品——ライトの代表作『アメリカの息子』(1940)とドストエフスキーの原点との呼び声高い『地下室の記録』(1864)——を精読することで、意識の描写という点において『アメリカの息子』が『罪と罰』に加えて『地下室の記録』とも響き合うことを示したい。『地下室の記録』がペテルブルグにおいてスラヴと西洋とに意識が二重化する主人公を描くように、『アメリカの息子』もシカゴという人種混成都市にてアメリカ人と黒人とに意識が二重化した主人公を描いている<sup>3</sup>。アメリカ文学研究において、『アメリカの息子』が描くような二重の意識は人種差別政策のもと市民権を剥奪されてきた黒人に特有の意識であると考えられてきた。しかしライトが『アメリカの息子』執筆期にドストエフスキーに傾倒していたという伝記的事実を踏まえたとき、『アメリカの息子』が『地下室の記録』およびその意識描写を参考としている可能性がある<sup>4</sup>と論じるのもあながち的外れではないだろう。ライトによる意識描写がどこまで意図的にドストエフスキーを参照しているのかを知るための伝記的資料は少ないが、両作品中には確実にドストエフスキーとライトとの、偶然的、あるいは意図的な相似関係が透けてみえる。本稿の前半部ではロシア文学と黒人文学とを結びつける

---

において、ロシア文学と南部文学が、広大な土地、産業化の遅れ、階級格差、敗戦などの共通の主題を扱っていることを指摘している。詳しくは Bloshteyn, Gwynn, Weisgerber を参照のこと。ドストエフスキーに影響を受けたユダヤ人作家の代表格は Saul Bellow である。

<sup>2</sup> 『罪と罰』と『アメリカの息子』の比較研究は Stanton, Lynch, Magistrare, Reed を参照のこと。『地下室の記録』とライトの「地下を生きた男」および『アウトサイダー』との関係性は Adelman, Jones, Peterson, Watkins が詳しい。

<sup>3</sup> ライトは “How Bigger was Born” という講演原稿において、『アメリカの息子』の主人公が二重の意識にさいなまれていることを指摘している。主人公はアメリカの息子 (native son) なのだからアメリカ人であるはずなのだが、アメリカ人として生きることを許されていないがゆえに黒人のナショナリストでもあるのだという (527)。

歴史的・社会的背景について説明していく。後半部では二作品の主人公が共通して抱く二重の意識とその行方を明らかにしていきたい。

## ロシア文学と黒人文学を結ぶもの(1)：スラヴ／スレイヴの経験

ステューヴン・マークスによれば、黒人作家たちがロシア文学を真剣に読み始めたのは黒人初の芸術文化運動ハーレム・ルネサンスが花開いた1920年代以降のことだった。奴隷制廃止から60年をへて、黒人作家たちは奴隷制の過去と結びついた「古い黒人 (Old Negro)」のオルタナティブとなる「新しい黒人 (New Negro)」像を創造しようともがいていた。このような芸術的試みにおいて、黒人知識人たちはロシア文学に惹かれていくわけだが、その理由を少なくとも二つ挙げることができる<sup>4</sup>。一つ目は、ロシア文学が西洋文明から排除され劣等視される者の意識を描いていることである。これは黒人作家たちが西洋文明から排除された黒人たちの意識を描くうえでの参考となった。二つ目は、ロシア文学が農奴解放に端を発する社会変革期を映しだしていたことである。これは黒人作家たちが奴隷制廃止後の変革期を描くための新たな視点を与えた。ロシア文学における西洋／スラヴという対立は黒人文学の西洋／アフリカと呼応し、ロシア国内における西洋化されたエリート／元農奴という階級的対立は、アメリカ国内における白人／元奴隷という人種的対立と呼応するというわけである。

ロシア文学における西洋／スラヴと黒人文学における西洋／アフリカとがいかに共鳴するかを考えると、スラヴ民族と黒人がともに西洋への隷属を強いられた集団だったという事実は重要だ。中世にゲルマン民族が東欧のスラヴ民族を奴隷としていたため、スラヴ民族が自らを呼びあわすために使っていた“Slavs”という語から、隷属状態を意味するラテン語“sclavus”が派生した。9～10世紀には“sclavus”はあらゆる奴隷を指す言葉として使われ、近代英語の“slave”の語源となったのである。(The Merriam-Webster 432)。

奴隷だったということ、それはスラヴ民族と黒人たちが、西洋人よりも劣等な民族・人種とみなされていたことを意味する。ロシア文学と黒人文学との親和性について通時的にまとめたデーブル・ピーターソンの *Up from Bondage: The Literature of Russian and African American Soul* によれば、ロシア人と黒人が西洋人よりも劣等であると定義され、西洋近代文明や啓蒙主義から除外されてきたという歴史的事実こそが、両文学作品が偶然にも類似した主題を扱ってきたこ

<sup>4</sup> ハーレム・ルネサンス期の作家の中でも『新しい黒人 (The New Negro)』(1925)の編者 Alain Locke は、作家 Jean Toomer が『砂糖きび (Cane)』(1923)においてアメリカ南部の大地を、スラヴ民族の故郷たるロシアの大地と重ねながら、南部を黒人の魂の故郷として描くことを称賛している (The New Negro 51)。詩人 Langston Hughes は自伝『大海原 (The Big Sea)』において黒人たちの間に「ロシア的なものの流行 (“the vogue for things Russian”）」があったことを言及している (228)。

との根底にあるのだという。なるほど西洋啓蒙思想をひもとけば、西洋側がロシアやアフリカを劣等視していたという証拠は枚挙にいとまがない。遺伝学や進化論といった近代科学を後ろ盾とする博物学は、極端な気候のせいでアフリカ人とロシア人の進化が遅れていると考えた。気候が生物的欠陥を引き起こすという考え方はフランスの博物学者ビュフォン伯爵にも顕著である。彼はアフリカ人が西洋人よりも愚かなのは、恵まれた気候下において作物を育てる創意工夫をする必要がなかったからだと考えた（フレドリクソン 56）。同時期、ロシアに赴いたフランスの天文学者ジャン・シャップ・ドートロシュは『シベリア旅行記』（1768）の中で、極寒の気候がロシア人の神経や内臓の進化を遅らせているのだと記した。啓蒙主義の分類学的手法により、スラヴ民族と黒人はこうして人種分類の下位階層へと位置づけられていった。アフリカが暗黒大陸だったならばロシアは「もう一つの暗黒大陸」として西洋の進歩主義的歴史観から排除されてきたのである（*Up from 5*）。

近代ロシア文学と黒人文学は、「ロシア人と黒人は完全な人間としての地位が欠如して」おり「人間文明という偉大な職務に参加する能力がほとんどない」のだという西洋側の認識への応答となっている（*Up from 6*）。ロシア作家と黒人作家は、自身の民族／人種には「真正な文化的特性が存在することを主張し、脱植民地化された様式の民族的自己表現を創造するために長年にわたり闘ってきた」（*Up from 6*）。西洋から除外されているという共通点により、両文学には西洋と土着の価値観との対立、民衆文化に根差すナショナリズム、隷属と自由などといった類似する主題がはぐくまれていったのである。

ロシア人作家のなかでもとりわけ、ドストエフスキーはロシアと西洋の優劣関係を意識していた。ロシアの西欧に対する心理構造を分析する望月哲男によれば、ロシア人は帝政時代から、いち早く近代化と産業化を成しとげた「神聖なる奇蹟の国」である西欧への尊敬と親近感を抱いてきた。だがその親近感は一方向で、西欧人からスラヴ民族への「憎悪、軽蔑、警戒心」は消えることはなかった。ドストエフスキーは西欧の反ロシア意識を嘆き 1876 年の『作家の日記』にこのように記しているのだという。「まったくのところロシアはロシアであるということだけで罪があるのだし、ロシア人はロシア人つまりスラヴ民族であるというだけで罪人なのだ。ヨーロッパにとってスラヴ民族は憎むべき存在である。les esclaves つまり奴隷だというわけだ」（qtd. in 望月 136）。

ドストエフスキーと同じように、20 世紀初頭の黒人作家たちも西洋人がアフリカ人や黒人を後進的かつ未開な人種とみなしていることを認識していた。この事実を示しているのが白人の間で流行した黒人音楽やダンスである。ジャズ・エイジとも呼ばれる第一次世界大戦期のアメリカにおいては、アフリカ人の原始的イメージをことさら強調したジャズの一形式であるジャングル・ミュージックや、ジョセフィン・ベーカーのエキゾチックなバナナ・ダンスなどが

流行っていた。白人の未開信仰（primitivism）に後押しされ人気となったこれらの異国情緒あふれるパフォーマンスが、西洋人よりも生来的に劣等な黒人というステレオタイプを量産していたことはいうまでもない。

このような状況下において黒人思想家 W.E.B. デュボイスは「才能のある十分の一」という理論を提唱したが、これは才能ある黒人エリートたちが卓越した芸術文化の担い手であることを証明し、黒人が劣等であるという白人側の思い込みを覆そうとする試みであった。黒人知識人の側からの働きかけはしかし、黒人の人間性を証明するという本来の目的を達成するよりもむしろ、白人にこびへつらう黒人というさらなる負のステレオタイプを定着させてしまったという側面もいめない。ライトは白人に認められようと奮闘した一世代前の黒人エリートたちが「奴隷根性という短パンをはいて世論の法廷に入り、黒人が劣等ではないこと、黒人が人間であること、黒人がほかの人々と同じような生活をしていることを見せつけるために、ひざを曲げてお辞儀を」するさまを批判している。「奴隷根性という短パン」という言葉でライトが暗示するのは、顔を黒塗りにした白人が滑稽な黒人を演じる minstrel show の衣装である。黒人エリートが、白人にとって都合のよい隷属的な黒人像を演じ続ける限りにおいて、彼等は「賢い芸をするプードル犬」（“Blueprint” 194-5）と何ら変わりがなくことをライトは批判したのだ。

ドストエフスキーとライトの第一の相似点は、両作家がロシア人と黒人が心理的に西洋に隷属し続けていることを痛々しいまでに熟知していたことにある。いかにしてスラヴ／スレイヴという隷属意識は人々のなかに生みだされ克服されていくのか。このような問いかけこそが、ロシア文学と黒人文学、ドストエフスキーとライトとを結びあわせる要素なのだ。

## ロシア文学と黒人文学を結ぶもの（2）農奴解放／奴隷解放と大都市

ロシアの農奴制廃止とアメリカの奴隷制廃止が両作家にもたらした影響をたどることも重要である<sup>5</sup>。広大な大地を持つロシアとアメリカにおいて農業労働力の確保を目的として維持されてきた農奴制と奴隷制は、それぞれ 1861 年と 1863 年というほぼ同時期に廃止された。ドストエフスキーとライトは、解放後に元農奴／元奴隷が流入した大都市ペテルブルグ／シカゴに生活しており、その混乱を目撃するという共通体験をしているのだ。

ドストエフスキーと農奴解放後のペテルブルグとの関わりからみてみよう。ドストエフス

---

<sup>5</sup> ロシアの農奴制とアメリカの奴隷制の相似と相違点については Kolchin を参照のこと。レーニンのように農奴制と奴隷制とを重ね合わせる知識人は多く存在したが、両制度が多く点において異なっていたことも指摘されている。一般的には奴隷制よりも農奴制の方がより農奴の主体性があった。

キーは1821年にモスクワに生まれペテルブルグで成長した。父親は農奴を有する医者だったが、暴力的な人格ゆえに農奴に殺された。1849年、28歳のとき、ドストエフスキーはユートピア社会主義のサークルに加わるが逮捕され、シベリアに連行され死刑を宣告された。銃殺の準備がととのったまさにそのときにニコラス大帝の恩赦が言い渡されるという衝撃的な体験をし、10年におよぶシベリアでの懲役生活を終えて1859年にペテルブルグへと戻ったドストエフスキーは、シベリアの獄中生活に基づく『死の家の記録』(1860)、ペテルブルグを舞台とする『虐げられた人々』(1861)、『地下室の記録』(1864)、『罪と罰』(1866)などを矢継ぎ早に発表した。

これらの作品の舞台である1860年代のペテルブルグは農奴解放後に流入した農民により人口が急増する一大犯罪都市だった。『罪と罰』においてとある医師は農民の惨状について語っている。「(農民)はみんながみんな、上げ膳据え膳の暮らしで、おんぶに抱っこで、他人まかせの生活に慣れきっていた。ところがそこへ、農奴解放のゴングが打ち鳴らされた。で、たちまち猫も杓子も本性をむきだしにしたってことです」(『罪と罰 1』359)。農奴制時代、農奴たちは貴族の領地においてある程度の人格と安定した生活を保障されていた。突然の農奴解放令はしかし解放農奴に土地を与えることはなく、自営農民となることのできなかつた人々の多くが職を求めて都市へと移住した。帝政期ロシアの思想家で農奴解放のために奔走したアレクサンドル・ゲルツェンが皮肉ったように、農奴解放は農民にとっては「飢えと放浪への解放」でしかなかった(亀山、「ドストエフスキーの生涯」446)。ペテルブルグで元農奴を待ち構えていたのは、西洋化したエリート層と貧しい者たちとの格差であった。金か飢えかという限られた選択肢しか持たぬ貧しい者たちのなかに犯罪まがいの手段で金を得る行為が蔓延していくなか、『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフもまた極貧生活から脱出するべく金貸しの老女を殺害するにいたる。

ドストエフスキー作品はかくして、農奴制廃止後に、旧来の農奴制に基づく農村的共同体や価値観が失われ、急激に近代化・都市化するペテルブルグにおいて虐げられた人々に光をあてる。多くの作品には西洋化されたエリート層と元農奴階級の民衆との格差が描きだされているが、ドストエフスキーの関心は一貫して弱者の精神状態へと向けられていた。その作品には、農村的絆から引き離され、大都市において孤独を味わい、アルコール中毒となり、娼婦となり、醜態をさらけ出す病的な意識が記録されているのだ。

なかでもライトはドストエフスキーが19世紀のペテルブルグにて感じていただろう混沌を、20世紀のシカゴにて感じとっていたにちがいない。ライトは「数ある作家のうちでも、近代人をめぐるわたしの哲学をはじめに造形したのはドストエフスキーである」(qtd. in Lynch “Haunted” 258)と語っているが、ここでライトが言う「近代人」とは、農奴制の過去から断絶させられ、飢えと極貧の近代都市生活へと投げ出された貧しい人々、宗教への信念を失いあて

どなくさまよう人々に他ならない。ライトにとってロシア人と黒人という違いは関係なかった。ロシア文学を読んでいるときに湧きあがった共感と共苦の意識をライトはこう記している。「尊厳をもって生きる権利を否定された世界において人間が生きるためには、どれほどの人間生活と苦痛とが犠牲にならなければならないのだろうかという悲劇的な目算について語る苦々しい口調を遠くのロシアから聞いた。一万マイルも遠くの人々の行動や感情が、シカゴやアメリカ南部の路上を歩く黒人たちの心理傾向や衝動を理解するのを助けてくれた」(“How Bigger” 518)。奴隷解放後に南部から北部都市へと大移住をした黒人たちの悲惨な生活実体を描こうとするなかで、ライトは自然とドストエフスキーをはじめとするロシア文学に惹かれていったのである。

なるほど、ライトの生い立ちをたどってみても、なぜライトがドストエフスキーの作品を強い迫真性をもって受け入れたのかが納得できる。40歳のときに農奴解放を目撃したドストエフスキーとは異なり、1908年にミシシッピ州で生まれたライトは奴隷制を経験していない。とはいえ、ライトの祖母は奴隷で、幼いころに家族を捨てた父親は土地を持たぬ貧農だった。母子家庭で育ったライトは奴隷制廃止後にますます厳しくなった人種差別政策と極貧から逃れるために1925年にメンフィスに、1927年には北部都市シカゴへと移住した。ドストエフスキーにとってのペテルブルグは、ライトにとってのシカゴだったといってもよいだろう。食肉工場や製鉄所が栄え、アイルランド系、イタリア系、東欧系の移民たちが居住していたシカゴのサウス・サイドは、大恐慌期には奴隷解放後に南部から流入した自由黒人が集まるスラムと化していた。

貧困と飢えに苦しむ都市生活を送るうちに、ライトはドストエフスキーと同じように社会主義思想に興味を持ち1932年に共産党に加盟した。1934年から1941年まで共産党の文芸誌に作品を投稿するかたわら、シカゴのサウス・サイドを生きる黒人たちの意識を正確に描きとるべく創作の練習を怠らなかった<sup>6</sup>。自伝『アメリカの飢え』においてライトはこのように述べている。

わたしの心を動かしたのは、都会の環境が百姓育ちの黒人から徴収した悲しい税金とでもいうべき精神病の頻発だった。おそらくわたしの書くものは自己表現というより、理解のための練習といえただろう。自分にもわけのわからない要求にかられて、宗教的タイプの人間や、犯罪者タイプの人間や、ひねくれ者や、破滅した人間や、失望した人間を創り出すために、いろいろ言葉を操った。わたしの原稿には緊張と、すさま

<sup>6</sup> 共産党の機関紙 *New Masses* に、革命礼讃の詩 “I Have Seen Black Hands” (1934)、白人と黒人が協力し階級闘争を行うという主題の “Red Leaves of Red Books” (1935) を掲載した。*Partisan Review* には黒人リンチが主題の詩 “Between the World and Me” (1935) を出版し、その他の作品は共産党と関係する雑誌 *Left Front*, *The Anvil*, *International Literature* などにも発表された。

じい飢えと、死が満ち溢れた。(44)

ライトが黒人民衆の惨状を描くために、同じくシカゴを舞台に執筆したアメリカの自然主義作家セオドア・ドライザーを参考にしたことはよく知られている<sup>7</sup>。自然主義作家たちは環境決定論に基づき、所与の運命の流れに逆らうことすらできぬ無力で卑小な人間像を描いた。

しかしライトは自然主義文学の手法では社会変革の可能性を照らし出すことができないことを実感し、マキシム・ゴーリキーの社会主義リアリズム文学から新たな文学的方法論を学びはじめた (Peterson, “Long Journey” 375-377)。社会主義リアリズム文学とはブルジョワ社会における格差や抑圧の実体を記録するだけでなく、世界中のプロレタリアートが連帯し格差が解消されるだろうきたるべき社会変革後の未来を描くジャンルである。ロシアにおける社会主義リアリズムの祖ともいわれるゴーリキーは、元は農奴であったロシア民衆が社会主義的意識に目覚め、土着的・スラヴ的な民衆文化を抛り所としながらプロレタリアートとして連帯していくさまを記した。ライトはアメリカの自然主義的手法に社会主義リアリズムの手法を組み合わせることで『アンクル・トムの子供たち (Uncle Tom's Children)』(1938)をはじめとする初期作品を執筆した。ゆえに、初期の作品には自然主義の環境決定論的が内包されているだけではなく、ゴーリキーにならない黒人の民衆文化こそが、白人の資本主義と人種差別社会のオルタナティブとなりうるのだという主題も透かしみえる。

ライトはしかし 1930 年代後半から共産党および社会主義リアリズムからも距離をとっていく。共産党が表向きには人種平等を訴えつつも偏見に満ち溢れた組織であることに幻滅したライトは 1944 年に共産党を脱退する。同時期、ライトは社会主義リアリズムが階級的連帯の可能性を描くことはできても、個人の自由意志を描くことができないことに幻滅していた。そんなライトに一筋の希望をあたえたのがドストエフスキー文学だった。

巨大な運命に左右される卑小な人間像を描く自然主義文学や、個人よりも集団を優先する社会主義リアリズム文学とはことなり、ドストエフスキー文学においては人間の可能性が人間個人の自由意志にあるのだという考えがまさっている。ドストエフスキーは 20 世紀初頭の実存主義哲学者たちにより実存主義の先駆者とみなされたが、それはサルトルの言葉を借りれば彼が「もし神が存在しないとしたら、すべてが許されるだろう」(サルトル 50) と記し、人間の意識が神や運命からは独立した存在であることを示したからだ。ドストエフスキーの主人公たち

---

<sup>7</sup> ライトと自然主義文学およびマルキシズムとの関係については Watkins 論文および Michael Lynch の *Creative Revolt* (2 章) が詳しい。リンチによれば、共産主義に傾倒していたライトは自然主義的手法がマルキシズムと相性がよいことを認識していたのだという。自然主義もマルキシズムも、個人によってはコントロールすることのできぬ巨大な運命や宿命を重視し、個人意思を軽視する傾向があったからである (55)。



はもはや神が不在の世界において、自然主義の環境決定論や社会主義の全体主義的決定論に反抗しながら、何が善で悪であるのかを自分自身で見極めるために自由意思に従って行動する。個人の自由意思はときに『罪と罰』のラスコーリニコフのように犯罪行為を導いてしまうが、ラスコーリニコフの理論においては、「非凡人」の自由意思に基づく犯罪は、自己と社会とを再創造する力となりうるのである<sup>8</sup>。

批評家たちの多くはライトがドストエフスキーから個人主義および既存の価値観への「創造的な反抗」を学び取ったのだという点において一致している。ただし、ドストエフスキーがそうであったように、ライトもまた創造的な反抗が主人公の倫理意識の目覚めへと直結することがないことをわかっていた。後述するように、両作家は自由意思のもっとも暴力的な発露が殺人であるという危険性に光をあて、愛や倫理なくして行使される個人意思もまた無力であること伝えようとしているのだ。

農奴解放／奴隷解放という変革期を背景とし、伝統や集团的価値観から疎外されて生きる都市近代人の意識や意思を文学に表象すること、これこそがドストエフスキーとライトとを結ぶ文学的使命だった。より具体的には、その近代人の意識とは『地下室の記録』と『アメリカの息子』が描くような二重の意識と自己嫌悪の意識である。

### 『地下室の記録』と『アメリカの息子』における二重の意識

『地下室の記録』は、農奴解放令から3年後の1864年に出版された告白形式の中編だ。地下室の語り手は「諸君、わたしは誓って言う。意識しすぎること、これは病いである」と告白し、自身が病的なまでに自意識過剰であることを認識しているが、その原因として彼が「地球でもっとも抽象的かつフィクショナルな街」であるペテルブルグに住んでいることをあげている(15)。先述したように、西洋都市を模して建設されたペテルブルグには、西洋的なものとスラヴ的なものとが相克している。語り手はこの混淆都市において、西洋とスラヴの価値観とに二重化する意識の病理をわずらっているのだ。

語り手の意識をむしばむ西洋的価値観とは1840年代から1870年代にかけてロシアで流行したドイツ観念論的理想主義(カントなどの美と崇高に基づくロマンティズム)と社会主義的ユートピアニズムである。語り手はロマン主義に憧れつつもそれを非現実的であるとあざける

---

<sup>8</sup> ラスコーリニコフの実存主義的傾向は、彼のナポレオン理論にも明らかである。人殺しとは、ラスコーリニコフの言葉を借りれば、ナポレオンのように社会変革をする力を持つ個人(「非凡人」)がその自由意思により法律を踏み越え、現在あるものを破壊することで、新たな価値を創造する行為にほかならない。亀山郁夫らも指摘するように『罪と罰』のタイトルともなっている「罪」という概念はロシア語において「踏み越える」という意味を持つ。「罪＝踏み越え」は、世界創造の儀式として解釈される。

が、この小説自体も過去のロマン主義文学のパロディーとなっている。加えて語り手は社会主義的ユートピアの理想もあざけるが、これは本小説がチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』(1863)というユートピア小説のパロディーであることから明らかである。『地下室の記録』はこのように語りおよびパロディーという技法を通じて、西洋の合理主義や理性主義に基づく思想をあざけるわけだが、語り手が西洋をひどく嫌っているのかといえ、事態はそれほど単純ではない。なぜならば語り手は秘かに西洋の先進性に憧れを抱いてもいるからだ。

語り手の意識のなかには、西洋(合理性・先進性)と、それとは対極にある自己(非合理性・後進性)とが存在するが、この対立が引き起こす感情が二重の意識と自己嫌悪である。40歳の語り手が25歳の自分を回想する場面はこれを示している。

いったいなぜ、わたし以外のだれひとり、自分が嫌悪の目で見られているといったことを気にかけずにいられるのか？役所の同僚のひとりなどは、目をそむけたくなるようなあばた面で、しかも追剥ぎみみたいな顔つきをしていた。かりにこのわたしがあんな見苦しい顔をぶらさげていたら、たとえ相手がだれであれ、とてもそちらに顔をむける勇気などもてなかったろう。また、もうひとりの同僚は、いつも同じ制服を着ているものだから、そばによると、ぷんといやな臭いが鼻についた。ところが、彼らのどちらも何ひとつひけ目を感じているような様子がない。身につけている制服のことも、自分の顔のことも、精神面についても同じで、二人が二人とも、自分が嫌悪の目で見られていることなど想像もしていなかった。(75-6)

醜い外見や悪臭をはなつ同僚は他人から「嫌悪の目で見られている」ということに無頓着であるがゆえに自己を嫌悪することはない(のだと語り手は想像している)。対照的に語り手といえ、絶えず他者による嫌悪の視線(と語り手が認識するもの)を経由して自己を認識している。語り手は他人から「嫌悪の目で見られているらしい」という恐れにさいなまれるだけでなく、他者からの嫌悪の視線を内面化することで自己嫌悪の意識を抱き、最終的には他者の視線から逃れるべく地下室＝自意識の牢獄に閉じこもっているのだ。

ミハイル・バフチンは他者の視線を通じてしか自己認識をすることのできぬドストエフスキーの主人公たちが「人目を気遣う自意識の無限の悪循環」(782)に陥っているのだと論じる。地下室の語り手にとっての「人目」とは、彼の元学友ズヴェルコスのように西洋の教養を身につけたエリートや、目抜き通りを闊歩する将軍、近衛将校、貴婦人など社交界の人々からの視線を意味している。語り手は西洋化に成功した人々のまえを自分が「実に見苦しい恰好」で「すり抜けていく姿を想像するだけで」、「痙攣的な痛みを感じ、背中が熱くなるのを覚え」、まるで

「業苦に近い苦しみ」を味わうのだが、それはひとえに「こういう社交界の連中を相手にしたら自分はたんに、汚らわしい、役立たずのハエにすぎない」という劣等感があるからだ(90)。語り手の意識はここで〈自分で認識する私〉と〈他者(西洋)により認識される私〉とに二重化している。『地下室の記録』の根本的な主題とは、西洋からの視線にさらされた主体の「意識と言葉のあらゆる要素内における二つの意識、二つの視点、二つの価値観の交錯と切断であり、いわば原子のレベルにまで至る二つの声の遮り合い」(バフチン 428)なのである。

バフチンは語り手の意識だけではなく語りも二重化(あるいは対話化)しているのだと指摘する。語り手は地下室で「四十年間、壁の隙間に耳を押し当て、きみたちの言葉を盗み聞きしてきた」(67)と述べ、西洋化したエリート知識人たちである「きみたち」から自身へと向けられるだろう批判の言葉をあらかじめ自身の言説へと組み込む。語り手の独白はゆえに、他者の言葉が先取りされた想像上の対話となる。この語り口により、語り手は己の言葉の半分が他者の言葉でできあがっているということ、すなわち、彼の言説が西洋言説に強烈に依存しているのだという事実を暴露してしまっているのだ。

ツヴェタン・トドロフの『地下室の記録』論は、他者(西洋)に意識と言語において隷属している語り手が、表面的には隷属状態を苦痛に感じてはいるが、深層においてはそれを希求しているのだという逆説を明らかにした。語り手の決定的な苦悩とは「他者による侮蔑に満ちた視線なしには、男は存在できないという非在の意識」を持っていることなのだ。「非在の存在——他者に無視される透明人間——に成り果てるよりは、侮蔑の視線のほうがはるかに良い。だから地下室の男はあえて他者に嫌われるような行動をとり続け、他者に嫌悪される劣った奴隷の役割を演じ続けることで、自己の存在を証明しようとやっきになる」のである(202)。他者からの嫌悪に満ちた視線を引き受けることでしかもはや自己存在を感じることができないがゆえに、語り手はしまいには他者から嫌悪されるという苦痛の中に自己存在を感じるという、マゾヒスティックな快樂を見いだすに至る。

語り手のマゾヒズムを証明するのが、あえて「他者に嫌われるような行動」の数々である。まず語り手は成功した人生を歩む元学友ズヴェルコフの壮行会にむりやり参加し元学友を言葉で侮辱するという奇行におよぶ。語り手は公の場でエリートの学友を侮蔑する勇気があることを見せびらかすことで、友人たちを「征服」し「魅了」できるのだと信じている(119-120)。別の場面で語り手は彼を侮辱した将校との決闘を企て、その男に道を譲ることを拒むというささやかな復讐を果たすことで相手と「社会的に五分五分の立場に立てた」(96)のだと満足する。むろん語り手の侮蔑や決闘は、相手に対等な者として承認されるという目的を果たすどころかますます軽蔑されるという事態を招くわけだが、それは語り手がかくろんだ通りの結果でもある。語り手流の言い方をすれば、「自分自身の自由意思による、自由な欲望、きわめて野蛮なが

ら、自分自身の気まぐれ、時として狂気の沙汰と思えるほど苛立たしい自分の幻想」(46)に基づく奇行は、彼の存在が、たとえ嫌悪される存在としてではあったとしても、他者に認識されるという喜ばしい機会なのだ。自由意思に基づく行動は、語り手を臆病者の奴隷から意思と行動力とを持ち合わせた個人主体へと再創造する契機として、リンチの言葉を借りれば「創造的な反抗」として解釈されているのである。

このような独りよがりの信念が暴きだすのは、他者から劣等であると定義された者が抱く自己の再定義へのあくなき欲望だ。バフチンが論じるように、語り手は予測不可能な奇行を通じて「他者の口にのぼる自分の人格の定義に対して、やっきとなって闘っている」、そして「自己の内部の不完結性を感じ取り、自分を外見だけで決めつけようとするあらゆる定義を内側から突き破って、それを虚偽としてしまうような自己の可能性を感じているのである」(122)。自分自身を最終的に定義することができるのは自分に他ならないのだという可能性を胸に、語り手は二重の意識を克服しようとしているのである。

ここまでの議論をまとめれば、『地下室の記録』は二重の意識および自己嫌悪がいかにかに生成されていくのかについてのメタコメンタリーとなっている。(1) 自己嫌悪意識は、他者からの嫌悪に満ちた視線や言葉により形成され、(2) 他者からの視線は、〈自分にとっての自己〉と〈他人にとっての自己〉という二重意識を生み出す。そして何よりも重要なのは、(3) 二重の意識を持つ主体は隷属的な位置におとしまられているが、それ以外に社会に存在する方法を持たないために他者からの嫌悪の視線をますます求めるマゾヒストとなる。

このような意識の在り方は必ずしも 19 世紀のロシア人に特有のものだったというわけではない。アメリカの黒人文学もまた、19 世紀の奴隷制体験記から現代にいたるまで、黒人にとって二重の意識が不可避だったことを示してきた。この意識を理論化した人物として W.E.B. デュボイスの名をあげることができる。デュボイスは 1903 年の『黒人のたましい』で白人と黒人との間にカラーラインが引かれるアメリカ社会における「二重の意識 (Double Consciousness)」について説明している。

アメリカの世界——それは、黒人に真の自我意識をすこしも与えてはくれず、自己をもうひとつの世界（白人世界）の啓示をとおしてのみ見ることを許してくれる世界である。この二重意識、このたえず自己を他者の目によって見るという感覚、軽蔑と憐びんを楽しみながら傍観者として眺めているもう一つの世界の巻尺で自己の魂をはかっている感覚、このような感覚は、一種独特なものである。彼はいつでも自己の二重性を感じている。——アメリカ人であることと黒人であること。二つの魂、二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い身体

なかで戦っている二つの理想。しかも、その身体を解体から防いでいるものは、頑丈な体力だけなのである。(15-16)

デュボイスのいう「自己を他者（白人）の目によって見るという感覚」とは、黒人は劣等であるという白人側の信念を内面化することで、黒人たちが自己軽蔑の意識から逃れられないことを意味する。デュボイスとドストエフスキーの二重の意識はその構造が類似しているが、デュボイスは1903年の時点ではドストエフスキーを読んだことはなかったという。とはいえ、ドストエフスキー、バフチン、デュボイスの類似を単なる偶然であると片づけることはできない。事実、デュボイス以降の黒人知識人たちはバフチンを援用しながら分裂する黒人意識を検証してきた<sup>9</sup>。グローバリズムの潮流に後押しされた近年の批評において、二重の意識を持つ主体は複数の地域や文化に同時に帰属感を持つコスモポリタンな主体の在り方として肯定されることも少なくない<sup>10</sup>。だが、デュボイスやライトの生きた人種差別が日常だった時代においては、二重の意識は底知れぬ苦難の源でしかなかった。他者に嫌悪された自己を嫌悪するという、終わりなき自己否定の経験、それはデュボイスがいうようにともすれば黒人の身体を「解体」へと導きかねない。

ライトは自伝において二重の意識がもたらす苦難について明かしている。「(白人の) 黒人に対する憎悪が黒人の生活の場を白人のそれより低いものと規定した」社会において、「白人に嫌われ、しかも自分を嫌う文化の構成上の一部であるために、黒人は自分の中のほかの人が嫌うものを自分でも嫌うようになるのだ」(『アメリカの飢え』14)。このような自己体験が『アメリカの息子』の主人公ビガー・トーマスの二重の意識の下地となっているのだろう。ビガーの二重の意識は日常の何気ない会話や振る舞いの中に示される。ビガーが友人に「白人たちがどこに住んでいるか知っているかい」と尋ね、通りのむこうだと答える友人にむかって首をふり、拳を握りしめて自分のみぞおちに突き当てる場面はその一例だ。

---

<sup>9</sup> デュボイスの二重の意識とバフチンの多声性とを接続する試みとしては Dorothy Hale を参照のこと。アメリカの黒人知識人たちによるバフチン理論の受容については Dale Peterson (“Response and Call: The African American Dialogue with Bakhtin.”) が詳しい。Peterson によればバフチンの著作がアメリカで翻訳出版されたのは1968年で、70年代にはすでに「バフチン学派」が存在していた(761)。バフチンはロシア・フォルマリズムやアメリカの新批評のようにテキストの自律性や完結性を支持する立場とも、脱構築の意味が無限に差延されるという立場とも異なり、代わりに言語がいかに日常的対話において意味を成すのかという点、responsibility や answerability (応答性) を重視した。このような考え方が、黒人民衆の口承伝統を検証する黒人文学研究者には魅力的だったのだという。

<sup>10</sup> 黒人文学批評家の Stepto, Baker, Gates, Gilroy などとはそれぞれ異なる方法で、バフチンを経由しつつ、二重の意識から生みだされ得る黒人の転覆的な発話および芸術表現の可能性、バフチンの対話性と黒人民衆に根付く口承伝統との親和性、さらに二重の意識を持つ主体とトランスナショナルな主体性の連続性などを論じている。

「ここだ、俺の腹の中だ」 ビガーは言った。

ガスは探るような眼でビガーを見つめていたが、目を逸らすときまり悪そうに「ああ、わかるぜ」とささやいた。「白人のことを考えるといつも、ヤツらを感じるんだ」ビガーは言った。「ああそうだ、胸の中にも、喉の奥にも感じるんだ」ガスは言った。「炎みたいなものさ」「ときどき呼吸すらできなくなる。」「そんなとき俺はなにかひどいことが自分におきるんじゃないかって感じるんだ・・・自分にはどうしようもできないなにかが。」

(22-23)

白人が自分の身体の内部に潜んでいるという感覚は、二重の意識がもたらす身体感覚だといえる。ビガーの身体の内部では〈ビガーにとっての自己〉と〈白人により定義された自己〉が相克している。白人側から劣等視されるという体験を重ね、ビガーはやがて〈白人により定義された自己〉のみが独り歩きしていくような感覚を覚える。

白人たちはただそこに立って彼を見つめるだけでビガーに黒い肌を感じさせた。そのとき彼は自分が全く存在していないかのように感じたのだ。彼は彼が嫌う何かであり、彼の良く知っている恥の烙印がその黒い肌におされているのだ。(76)

白人たちの視線にさらされ、ビガーは自分というものが消失し、代わりに白人により嫌悪される「恥の烙印」が押された黒い肌という存在を強烈に意識する。この瞬間、ビガーは自分の意思により自己を定義する可能性を放棄し、白人による負の定義を引き受けてしまっているのだ。

『地下室の記録』のように、『アメリカの息子』はもはや他者の視線なくして自己存在を知覚できぬ主人公を描いているのだ。だから、一見すると白人に押し付けられた劣等者、野獣、犯罪者、道化などのステレオタイプに抗おうともがくビガーは、無意識のうちにそれらを受け、白人に規定された通りの黒人像を演じてしまうことでしか自己存在を確認できない。ビガーの殺人はこのような文脈で解釈することができる。ユダヤ人弁護士マックスに白人女性を殺害した理由を尋ねられたビガーは、自分にまわりつく負のステレオタイプこそが彼を犯罪者にしたという持論を展開する。

「それは、やはり、黒人はそういうことをすると、やつらが言っているからだと思います。マックスさん、あなたもご存じでしょう、白人の中にはそう言っているものがあることは？黒人は、淋病にかかると、白人の女を犯すと云っているし、白人の女を犯すと、淋病が治ると信じているからだ、とも言っています。白人の中には、そう言っている者

がいるんです。そう信じてもいるんです。マックスさん、まわりの人間から自分のことをそんなふうに言われてたんじゃ、生まれてないうちから罰しられているようなものですよ。」(406-7)

生まれた時からたえず負のステレオタイプにさらされてきた者は、罪をおかす前から罪人である。これは『アメリカの息子』においてたびたび主張されるロジックだ。ビガーは「黒い皮膚は悪であり類人猿の皮膚と同じようなものだ」と言われ続けてきたがために、自分でもそうであるような気がし、罪を犯してもいないうちから罪悪感にさいなまれ(317)、しまいには自分でもよくわからないうちに本物の殺人者になってしまった。

だからこそライトはビガーの殺人を——殺意ではなく二重の意識により誘発された偶然の犯罪として——描いたのである。『罪と罰』のラスコーニコフが計画殺人に及んだこととは対照的に、ビガーに殺害の意図は全くなかった。それにも拘わらずビガーを殺しへと導いたのが、彼を生まれながらの犯罪者とみなしてきた白人たちの視線、さらにその視線を内面化したビガーの二重の意識であることを殺人の場面はほのめかす。白人家庭のお抱え運転手だったビガーは車中で酔っぱらった雇い主の娘メアリを部屋へと連れて行くが、そこに突然メアリの盲目の母親があらわれる。黒人男性の自分と白人女性のメアリが一緒にいるのだから、母親は黒人男性がレイプ犯であるというステレオタイプに従って、ビガーがメアリをレイプしたのだと誤解するに違いない。黒い肌を悪とする社会においてビガーは「人を殺す以前から有罪」なのだから。とっさの判断でビガーはベッドに横たわるメアリの顔を枕で押さえ、盲目の母親にメアリが眠っているのだと思いこませようとするが、メアリは窒息死してしまう。弁護士マックスはビガーを弁護しようと試み、なぜ母親が入ってきた時に、酔っぱらった娘を介抱していたのだと正直に説明しなかったのかとビガーに問う。ここでのビガーの返答は『アメリカの息子』という小説における名場面の一つだろう。

「マックスさん、ひとはどういおうと、わたしはどうすることもできなかったんです。振り向いて、あのひとがベッドのほうへ来かかっているのを見た時には、正直言って、自分にも自分のしていることが判らなくて」

「頭が空白になったという意味かい？」

「いや、そうではないようです、ちゃんと自分のしていることに気が付いてはいました。ですが、そうするしかなかったんです。そういう意味なんです、私の皮膚から別の人間が歩み出てきて、わたしの代わりに行動してみたみたいな。」(407)

ビガーの身体から歩み出てきた「別の人間」とは、白人による嫌悪の視線が造り、ビガーが無意識のうちに演じてしまった殺人者としての黒人だ。この場面が何より興味深いのは、この瞬間を機に、ビガーが殺人者である「別の人間」を真の自己として肯定し始めることだ。

『アメリカの息子』が実存主義的であると形容される理由は、ビガーが殺人を反省するどころか、それを自由意思による自己と世界の再創造の契機として解釈する様子を繰り返し描いているからだ。ビガーは「彼は人を殺し、自分の力で新たな人生を創造したわけだ」と殺人を肯定し、生まれて初めて「恐怖のまじった一種の誇り」すら感じる（119）。自分の恋人を口止めのために意図的に殺害したあとのビガーにはさらなる力が湧き上がってくる。

今までに起きた一切の出来事にわたって、一種の奇妙な力の意識が、それとはっきり感じられないものの、まがいのないものとして彼のうちには存在していた。おれがこれをやってのけたのだ。おれがこうしたことすべてをもたらしたのだ。彼の全生涯でも、この二度の凶行は、今迄に彼に起きた最も意義深い出来事だった。…一度として、これほど自分の行為の結果を生き抜く機会を持ったことはなかった。今度の不安と殺人と逃走との昼夜ほど、自分の意思が解放されていたことはなかった。（277）

殺人前の段階において、ビガーは黒人であるという宿命を受動的に受け入れるだけの自然主義的な登場人物だったが、殺人後には一変して人殺しを「意思の至高の行為」（316）とみなし、自由意思により自己と世界とが再創造される可能性を確信する実存主義的な主体へと変貌する。まもなく処刑されるビガーが口にする「わたしが人を殺した理由がなんであれ、わたしは存在しているんです！」（306）という発言はとくに多くの批評家により実存主義と結びつけられてきた<sup>11</sup>。ここに『アメリカの息子』と『地下室の記録』とを結びつける主人公の主体性をみいだすことができる。地下室の語り手が逸脱行為により自己存在の再定義と再創造を試みるように、ビガーは殺人により二重の意識が克服され、真なる自己が再創造されるかのように感じる。だからこそ、物語の最後、死刑の直前にビガーは叫ぶのだ、「わたしのひとを殺した理由は、正当だったに違いないんです！」と（501）。

## 二重の意識のことなる行方

主人公の二重の意識と、それが誘発する罪を描き出す点においてドストエフスキーとライト

<sup>11</sup> この場面を実存主義と結びつける批評家には Yolanda や Nelson がいる。一方で Garcia はここで描かれる実存主義がヒューマニズムと矛盾する類のものであると主張している。



の作品には相似関係があるということが出来る。だが二重の意識の行方はかなり異なっている。ドストエフスキーは二重の意識の行方に救済をみいだしたが、ライトには死しかみえていなかった。この違いをどのように説明すればよいのだろうか。

二重の意識の議論は、マイノリティの自己嫌悪が他者からの視線により生成されるのだという構築主義的な立場をとる。この前提はともすれば二重の意識に起因する地下室の語り手の奇行やピガールの殺人の責任が、個人ではなく不平等を正当化してきた社会環境にあるのだという議論へと横滑りしがちである。しかし地下室の語り手とピガールは本当に環境の被害者でしかないのか。

ドストエフスキーにとって答えは否である。『地下室の記録』や『罪と罰』は劣悪な環境要因によってのみ犯罪者が産み落とされるのだという環境決定論、さらに犯罪を虐げられた者たちにとっての創造行為として肯定する理論の両者に異議申し立てをするべく書かれている。環境を犯罪の要因とみなしてしまえば、犯罪者の個人責任を追及することは難しい。一方で、その責任を個人に帰してしまえば、人間存在に本質的であるとドストエフスキーが（そしておそらくライトも）考えていた愛や思いやりといった感情を描くことができない。このようなジレンマに直面し、ドストエフスキーは二重の意識の最終的な行方を、犯罪責任がどこにあるのかという議論ではなく、ロシア正教に裏付けされた倫理と愛への目覚めの可能性として示そうとしている。

多くのドストエフスキー作品には、殺人者にすら贖罪の道が開かれているのだという「救世的ナショナリズム (messianic nationalism)」(Marks 65) がほのめかされている。「犯罪自体からラスコーリニコフの倫理的成長が始まるのだ」と明かしたドストエフスキーは、殺人者ラスコーリニコフが売春婦ソーニャの愛により更生するだろう希望で『罪と罰』の幕を閉じたが、同じことが『地下室の手記』についても言える。地下室の語り手は奇行のすえに売春婦リーザと出会い彼女を肉体的かつ精神的に侮辱するが、語り手の予想に反しリーザは語り手の弱さを受け入れ彼を抱きしめる。語り手は「女性にとっては、愛のなかにこそ復活のすべてが、それがどんなたぐいの破滅であれ、そこからの救いと更生のすべてがひそんでいる」ことをたとえ東の間ではあったとしても悟る (217)。トドロフは他者と憎悪関係しか築けぬ語り手が、「他者のための他者への愛」をもつリーザに抱きしめられるこの瞬間に、あらゆる主人と奴隷の優劣関係が解消されるだろう、人間同士の相互的かつ根源的な身体的結びつきへの回帰をみいだしている (212)。このように『地下室の記録』は語り手が、他者を犠牲にすることをいとわぬ自由意思の主体から、ロシア正教の自己犠牲愛を持つ主体へと再生される希望を確かに暗示しているのだ。ソーニャにより十字架を渡されるラスコーリニコフ、リーザを追いかけ十字路へと進んでいく語り手の行方には「十字」が暗示する宗教的救済が開けている、そう読者に感じさ

せるようにドストエフスキーは書いている。

しかしライトは『アメリカの息子』に宗教による救済を描くことはしなかった。ラスコーリニコフと同じようにビガーも獄中で牧師から渡された十字架を首にかけていたが、ビガーは「あれはキリストの十字架ではない、K.K.K.の十字架なのだ。おれは救いの十字架のつもりで首にかけていたのに、やつらは、おれを憎悪していることをわからせるために、十字架を焼いているのだ！畜生！こんなものはいらん！」(391)とそれを捨てる。ビガーはキリスト教が信仰心という名の服従を黒人に押し付ける白人側の支配装置でしかないと感じずにはいられない<sup>12</sup>。いまだ人種暴力が続く1940年において、ライトは二重の意識が解消される地平を宗教に見出すことなどできなかったのだ。愛や倫理意識に目覚めることなく処刑されるビガーは、この時代を生きる黒人にとって、二重の意識の行方が死以外にはありえないという絶望を物語るべく造られた主人公なのだ。ドストエフスキーに影響を受けながらも、二重の意識の行方という点においてライトは、はっきりと分岐していく。

## おわりに

ドストエフスキーとライトの描くペテルブルグとシカゴは、西洋的なものとスラヴ的／黒人的なものが交差する十字路だ。そのような混成都市において、西洋とスラヴ／黒人とに二重化する意識は、ドストエフスキーとライトという二人の作家により物語とされ、ことなる方向へと分岐していった——ドストエフスキーにおいては救済へ、そしてライトにおいては死刑へと。ドストエフスキーとライト、ロシア文学と黒人文学、両者の偶然の、そして意図的な一致から、ロシアおよびアメリカ文学史が得る知見は大きいのではないだろうか。

## 参考文献（日本語）名字の五十音順

大内義一 鈴木三喜男『リチャード・ライトの世界』評論社、1981年。

亀山郁夫「ドストエフスキーの生涯における『罪と罰』』『罪と罰2』光文社、2009年。

後藤明生『都市のジャーナリズム——ドストエフスキーのペテルブルグ』三省堂、1987年。

ジャン・ポール・サルトル『実存主義とは何か』伊吹武彦訳、人文書院、1996年。

W.E.B. デュボイス『黒人のたましい』木島始、黄寅秀、鮫島重俊訳、岩波書店、1992年。

フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー『新訳 地下室の記録』亀山郁夫訳、集英社、2013年。

--- 『罪と罰1』亀山郁夫訳、光文社、2008年。

---

<sup>12</sup> ライトとキリスト教との関わりについては Singh を参照のこと。

- . 『罪と罰 2』 亀山郁夫訳、光文社、2009 年。
- . 『罪と罰 3』 亀山郁夫訳、光文社、2009 年。
- ツヴェタン・トドロフ『言語の諸ジャンル』小林文生訳、法政大学出版局、2002 年。
- ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男、鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1995 年。
- フレドリクソン・G・M『人種主義の歴史』李孝徳訳、みすず書房、2009 年。
- 望月哲男「ドストエフスキー： 評論家と小説家： ロシア・西欧論の心理構造をめぐって」『スラヴ研究』39、1992 年。131-152。
- リチャード・ライト『アメリカの飢え』高橋正雄訳、講談社、1978 年。

### Works Cited

- Adelman, Gary. *Retelling Dostoyevsky: Literary Responses and Other Observations*. Lewisburg: Bucknell UP, 2001. Print.
- Baker, Houston A., Jr. *Blues, Ideology, and Afro-American Literature: a Vernacular Theory*. Chicago: U of Chicago P, 1984. Print.
- Bloshteyn, Maria. "Dostoevsky and the Literature of the American South." *Southern Literary Journal* 37 (2004): 1-24. JSTOR. Web. 15 Feb.
- Gates, Henry Louis. *The Signifying Monkey A Theory of African-American Literary Criticism*. Oxford : Oxford UP, 1988. Print.
- Gilroy, Paul, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 1993. Print.
- Gwynn, Frederick L. "Faulkner's Raskolnikov." *Modern Fiction Studies* 4.2 (1958): 169-72. Print.
- Hale, Dorothy, J. "Bakhtin in African American Literary Theory." *ELH* 61.2 (1994): 334-371. JSTOR. Web. 15 Feb.
- Jones, Anne Hudson. "The Plight of the Modern Outsider: A Comparative Study of Dostoevsky's *Crime and Punishment*, Camu's *L'etranger*, and Wright's *The Outsider*." Diss. University of North Carolina. 1974. Print.
- Kolchin, Peter. *Unfree Labor: American Slavery and Russian Serfdom*. Cambridge: Harvard UP, 1987. Print
- Locke, Alain. *The New Negro: Voices of the Harlem Renaissance*. 1925. New York: Touchstone, 1997. Print.
- Lynch, Michael F. *Creative Revolt: A Study of Wright, Ellison, and Dostoevsky*. New York: Peter Lang, 1990. Print.
- . "Haunted by Innocence: The Debate with Dostoevsky in Wright's 'Other Novel' *The Outsider*." *African American Review* 30.2 (1996): 255-66. JSTOR. Web. 15 Feb.
- Magistrale, Tony. "From St. Petersburg to Chicago: Wright's *Crime and Punishment*." *Comparative Literature Studies* 23 (1986): 59-69. Print.
- Marks, Steven G. *How Russia Shaped the Modern World: from Art to Anti-Semitism Ballet to*

- Bolshevism*. Princeton: Princeton UP, 2003. Print.
- McCullers, Carson. "The Russian Realities and Southern Literature." *Mortgaged Heart*. Boston: Houghton Mifflin, 1971. 252-258. Print.
- Peterson, Dale E. "Response and Call: The African American Dialogue with Bakhtin." *American Literature* 65.4 (1993): 761-775. JSTOR. Web. 15 Feb.
- . "Richard Wright's Long Journey from Gorky to Dostoevsky." *African American Review* 28:3 (1994): 375-87. JSTOR. Web. 15 Feb.
- . *Up From Bondage: The Literatures of Russian and African American Soul*. Durham: Duke University, 2000. Print.
- Reed, Kenneth T. "Native Son: An American Crime and Punishment." *Studies in Black Literature* 2 (1970): 33-34.
- Singh, Raman K. "Christian Heroes and Anti-Heroes in Richard Wright's Fiction." *Negro American Literature Forum* 6.4 (1972): 99-104, 131. JSTOR. Web. 15 Feb.
- Stanton, Robert. "Outrageous Fiction: *Crime and Punishment*, *The Assistant*, and *Native Son*." *Pacific Coast Philology* 4 (1969): 52-58.
- Stepo, Robert B. *From Behind the Veil: A Study of Afro-American Narrative*. Urbana: U of Illinois P, 1979.
- The Merriam-Webster New Book of Word Histories*. Springfield: Merriam-Webster Inc., 1991. Print.
- Watkins, Patricia D. "The Paradoxical Structure of Richard Wright's 'The Man Who Lived Underground.'" *Black American Literature Forum* 23.4 (1989): 767-783. JSTOR. Web. 15 Feb.
- Weisgerber, Jean. *Faulkner and Dostoevsky: Influence and Confluence*. Athens: Ohio UP, 1974. Print.
- Wright, Richard. "Blueprint for Negro Writing." *The Portable Harlem Renaissance Reader*. Ed. David Levering Lewis. New York: Penguin, 1994. Print.
- . "How Bigger was Born." *Native Son*. 1940. New York. Harper Perennial, 1993. 505-540. Print
- *Native Son*. 1940. New York. Harper Perennial, 1993. Print.